■（１２６）４２１日ぶりの被災地、忘れないために

路線バスの停留所名は「仮設住宅前」。駐車場をはさんでプレハブ２階建ての商店街が建つ。高齢の女性が手押し車を押しながら宅配業者の事務所から出る。一画のポールの鯉のぼりは風がないのでぶらさがったままだ。そばを子供たちがじゃれ合いながら歩道を走る。

４２１日ぶりに東日本大震災の被災地に戻った。宮古市・田老にある仮設団地を再び訪ねた。大規模な保養施設の敷地にびっしり並ぶ仮設住宅。避難所だった体育館は改修中のようだ。支援や取材の車があふれていた駐車場は閑散としていた。何よりも、１年前にくらべると、少しだけ穏やかな雰囲気が漂っている気がした。初めて同所を訪れたのは８１４日前。津波に襲われてから１カ月半のころだった。体育館に被災者と支援者があふれていた。ほとんどの被災者は無言で床に座っていた。中央ではボランティアによる健康チェックが続けられていた。話しかけるのもはばかるような緊張感に包まれていた。

そばの道の駅に２０１２年９月発行のタウン誌が閲覧用に置かれている。津波や遺体捜索の写真が並ぶ。冒頭の見出しは「この景色を心のアルバムに貼っておこう」。同感。（山）